アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品：シン　ヱヴァンゲリヲン　劇場版

その 10

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスへの対峙

前回のおさらい

　エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしまう。

　シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

　今回のシン・ヱヴァンゲリヲン　劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そしてこの心性が思春期の人々の心の揺れ動き、喪失感それと同時に希望と再

生という点で非常に似通っているものを感じる。

喪失という観点でボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

２．シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

３．綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変わったか？

４．シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれ、無気力な状態に陥った。そんな絶望に打ちのめされていたシンジの心を受け止める、その母親の様な環境がトウジやケンスケの暮らす第三村であった。彼らに温かく迎えられることでシンジは立ち直り始めるきっかけを作り出した。そして第三村の人々との交流を通じて、人間らしい心を持つ様になった綾波とシンジが交流することで、シンジは綾波と同じ様にケンスケやトウジ達ら村の人々と交流を深めていく。その中でシンジは主体的になっていく。

その後、綾波はシンジの目の前で亡くなってしまう。そのシーンは非常に衝撃的であるが、一方で、第三村を離れ、ヴンダーに乗り、シンジ自身の父と対峙していくという現実に向きあうという、分離個体化の象徴の様にも考えられる。

5. ヴンダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様に変わったのか？

再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、ヴンダーの乗組員のシンジに対する思いは Q の様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違い、鈴原サクラを

はじめ、受容的になっている様に感じられる。

　これは、シンジが自分自身を受け入れるようになり、周囲の人々に対しても攻撃的ではなく、受け入れる心を持つようになったことを象徴しているように思われる。そしてシンジは自分がどうすればよかったのか？どうしていくことがいいのか？ということを考えられる様になってきている。

　それがヤマト作戦前夜のシンジとアスカが取り交わした会話である。その中で、シンジは、アスカの「私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」の問いに対し、「アスカが、３号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助けることも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」と語っている。この発言は自分が責任の元であるという発言である。

　いみじくもシンジは序でエヴァに乗り込むシーンで「逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ」と唱える様に言っていたが、シンジは周囲に対して迫害的に捉え、彼の心は、その中で向き合わなければならない思いと逃げたい思いで交錯していたと考えられる。それはシンジが心の中で良い対象を抱くことができず、それ故に自分を出すことができず、妄想分裂ポジションの心性でもがき苦しんでいた。

　そのシンジが、さまざまな喪失に直面し、強く絶望し、その中で第三村の人々

との関わりの中で、抑うつポジションの心性となり、現実を受け入れ、一人の人間として成熟している。

　このようにシンジはこれまで自分の周りに起きたこと、そして心身の発達によって生じた喪失を受け入れ、成熟し、一歩ずつ大人の階段を登っていている。そうしてシンジは父と対峙する心の準備を着々としているように感じられる。

その後、ヴンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかける。

6. シンジとヴンダーとの葛藤

　結局、ヴンダーのヤマト作戦は失敗し、アスカも亡くなってしまう。ゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、さらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。
　それを止めようと唯一「マイナス宇宙」にいくことのできるシンジはエヴァに乗ることを提案する。しかし、いざ、そうなると、ヴンダーの中の乗組員たちの思惑は色々異なっていた。そしてシンジのへの思いに関して、サクラ、ミドリをはじめシンジの提案に反対する方々おり、激しくぶつかり合う。

このシーンにおいて、情緒的に激しい思いをぶつけ合う中で、互いの思いを深く受け止めカタルシスを迎え、皆が一つの目的に向かって突き進むことにつながったと考えられる。そしてそれはシンジの心の象徴でもある様に感じられる。シンジは「僕は、僕の落とし前をつけたい」と言ったものの、本当に自分にはできるのか？また暴走して、ニアサーの様なことを起こしてしまい、周りを再び不幸にしてしまうかもしれないという不安を抱いていた可能性も十分考えられる。それ故に、きちんと決断するまでに色々な迷いがあり、その葛藤が生じていたと考えられる。色々な情緒がぶつかり合い、サクラの銃弾をミサトが身代わりに受け止めることで、シンジがエヴァに乗ることになったが、それはシンジの心の中で自分の激しい感情を自分の中の良い対象が受け止める象徴の様にも考えられる。

また、このシーンでこれまではめていることを苦痛に感じ、カヲルがはずし、彼が身代わりにつけたDSSチョーカーを、自ら装着したことが興味深い。

DSSチョーカーはこれまで、神への奉仕への象徴と述べてきたが、自らDSSチョーカーをつけるということは、これまでの様に衝動的に暴走して、解決しようとするのではなく（それ故に色々なことを破壊してきた)、自分の行動に責任

を持って行動するという決意であり、まさに心の成熟を表している。

→そしてシンジはマリの改 8 号機に同乗してゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

7. シンジと父との対峙　父殺し

　マイナス宇宙の中でシンジは父ゲンドウと対峙する。そこでシンジはゲンドウとぶつかり合う。その中でシンジとゲンドウはぶつかり合いながらも交流をしていく。それはシンジがこれまで触れることを怯え距離をとってきたものであり、シンジの殻であり、A-T フィールである様に感じられる。

父と対峙したシンジはエヴァを通してぶつかり合う

ここで今一度エディプスコンプレックスについておさらい。

エディプス葛藤　父・母・自分の三者の葛藤：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

→社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

２）父と対峙しぶつかるシンジ

シンジはゲンドウによってシンジの追憶の世界へと誘われていくが、このシーンでこれまででてきた色々な場面（エヴァの格納庫から始まり、第３新東京都市、ミサトの家、２年Ａ組の教室、綾波の部屋、ジオフロント、加持の畑。）がでてくる。それはシンジの内的世界を表している様に感じる。これまでシンジは日常的にいつも、自分の思いがきちんと受け止めてもらえず、跳ね返される様に感じてきたことを象徴している感じがする。そしてなにか思春期の子が親に自分を認めてもらおうとぶつかってくる感じに似ている。

確かにシンジの抱くエディプス葛藤を乗り越えるには、確かに父親を倒すことである。しかしゲンドウが「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と言っていた様に力で父を打ち負かすのは所詮、被支配－支配の立場が変わるだけである。それは、つまり肛門期の関係性のままなのである。

大切なことは父ゲンドウとシンジが対等な存在となることであり、それは相手を倒すことではない、お互いを強く知り、お互いの存在を認め合うことである。

ここまでシンジはゲンドウを悪い／良い対象と捉えている。しかしゲンドウ

自身が「希望の初号機と対を成す、絶望の機体」と言い、互いが同調して調律していると話している様に、良い対象と悪い対象は表裏一体なのである。そのことにシンジは気づかず、一心に攻撃し続け、跳ね返されることを続ける中（妄想分裂ポジションの心性）で、最終的に第３村を破壊してしまう。そこで自分が抱えられてきた良い対象達も傷つけてしまったのではないか？ということに気が付き、心を痛め、思いやりの心を持ち、争いを止める。まさに抑うつポジションへの移行を表している。

シンジにとって大切なことは、対象を知り、現実を受け止めていくことである。それが社会への一歩を踏み出すことであり、エディプス葛藤を乗り越えていくことなのだと考える。そのことにシンジは気がつき、「うん。父さんと話がしたい」とシンジは言ったと考える。

W.ビオンは人の出会いは認知からではなく、情緒的体験から始まるといい、その情緒と情緒を持って人は繋がると松木は述べている。

シンジの「父さんと話がしたい」と述べたことは父・ゲンドウと深く情緒的に関わり、自身のそして父の真実を深く知りたいという思いであり、それはこれま

での世界観や自分観、人間観を衝撃的に貫き根底から覆すことになる。シンジはその覚悟でこの言葉を言った様に感じる。

その覚悟からのシンジと父・ゲンドウとの深い情緒的な関わりが今後の父との会話で行われていく様に感じられる。

３）父との対話　アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

シンジ「父さん。父さんは、ここで何がしたいの？」

　シンジは NERV 本部の司令室で、ゲンドウと向かい合っていた。シンジの立ち位置からゲンドウが席につく執務机はだいぶ離れている。

ゲンドウ「このゴルゴダオブジェクトでしか起こし得ない、アディショナルインパクトだ。それが、私の神殺しへの道へとつながる。そのために最後の二本の槍を、ここに届けた」

（中略）

ゲンドウ「初号機パイロット、お前に見せたい物がある」

シンジ「これは、黒いリリス」

ゲンドウ「お前の記憶では、そう映るのか。エヴァンゲリオン・イマジナリー。葛城博士が予測した、現世には存在しない想像上の架空のエヴァだ。虚構と現実を等しく信じる生き物。人類だけが認知できる」

ゲンドウ「絶望と希望の槍が、互いにトリガーと贄（にえ）となり、虚構と現実が溶け合い、全てが同一の情報と化す」

　黒かったリリスが白に変わり、はりつけにされていた手が引き抜かれる。

音楽開始　What if? #12

ゲンドウ「これで自分の認識、すなわち、世界を書き換えるアディショナル・インパクトが始まる」

　白いリリスは、ゆっくり溜池に着水した。圧倒的な質量がオレンジ色の水しぶきを上げて波を起こす。ゲンドウは、それを迎え入れるかのように両腕を広げていた。

ゲンドウ「私の願いが叶う唯一の方法だ」

　シンジはその現象をじっと見ている。ゲンドウの目の前に巨人の顔が迫った。

そしてその巨人の顔は綾波レイの顔であった。

ミドリ「これが…アディショナル・インパクト？」

リツコ「ええ。恐らくあれが、エヴァ・イマジナリー。まさか実在するとはね」

　ヴンダーの視界を埋め尽くすほどの巨大な綾波が、髪を揺らしてこちらを向いた。そしてじっくりと凝視する。

ミドリ「変よこれ！（しばらく絶句する）絶対ヘン！」

赤く染まっていた大地の中で抜け殻のように浮かび、亡霊のように徘徊するエヴァ・インフィニティが、緑色の光の中で浄化されていく。

　浄化されたインフィニティの群れは、首のない無垢の肢体となり、同じ方向に歩き出し、大空へ飛び立つ。その光景を見ていた冬月が、満足そうな声を上げた。

冬月「うむ。ようやく始まったな」

冬月の背後に足音が響いた。

冬月「君か」

マリ「お久しぶりです。冬月先生。しっかしこの船の中、L結界密度が高すぎませんっ？」

冬月「ああ、元来有人仕様ではないからな。無理は承知だ。人には常に希望という光が与えられている。だが希望という病にすがり、溺れるのも人の常だ。私も碇も希望という病にしがみつき過ぎているな」

マリ「ゲンドウ君は、自らが補完の中心になることで願いを叶えようとしている。それを助けたい――いいえ、願いを重ねる冬月先生の気持ちも分かりますが、人類全てを巻き添えにするのは、御免被りたいにゃ」

冬月「だろうな。私の役目は終わりだ。君が欲しいものは集めてある。あとは、よしなにしたまえ。イスカリオテのマリア君」

マリ「ふふっ、超久しぶりに聞いたなあ、その名前。では、おさらばです」

　冬月は、写真を取り出し、悲しげな表情をそこに向けて、ぽつりと呟いた。

冬月「ユイ君、これでいいんだな」

そして冬月は綾波の様に破裂して亡くなってしまう。

【考察】

　アディショナルインパクトをなぜ起こしたのか？ゲンドウは虚構と現実を溶け合わせることだと話す。その様にして自分の認識を世界を書き換えるという。それはゲンドウの抱く虚構の本質は外的な現実を全能的に自分の都合のよいように操作することであり、内的現実を避けるために使われている様にみえる。冬月は「希望という病にすがり、溺れるのも人の常だ。私も碇も希望という病にしがみつき過ぎている」と述べているが、それはゲンドウも冬月もユイの喪失を受け入れられず、ユイを生き返らせたいという希望に執着し、歪んだ形で成就させようとしている。それは現実を見据え、主体的に関わりながら自分の思いを遂げていこうとする希望とは異なり、倒錯的である。

　このゲンドウのいう虚構はウィニコットのいう「空想」という概念に似ている。北山がいうにウィニコットは空想を「現実から乖離したものになりやすい」

欲望成就であり、「一般的に評価しない傾向」にあり、役立つものではないと考えていたようである。そして空想が内的現実を避ける為に使われ、そこから逃れるための躁的防衛の初期症状だとも述べている。

　だからこそシンジはゲンドウと真摯に向き合い、ゲンドウが「虚構」という病理から離れ、現実を受け入れ、シンジの今の姿をきちんと見て受けれてもらう必要がある。ゲンドウが現実に向き合うこと、それはユイという愛する妻はいなくなったが、ユイに似た、シンジという子どもがおり、彼が成長し、ゲンドウと対等の存在になるまでになっていることを受け入れることであると考えられる。

３）父との対話　アディショナルインパクト後

シンジ「父さんは何を望むの？」

ゲンドウ「お前が選ばなかったＡ・Ｔ・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎ

の世界だ」

シンジ「父さん、もうやめようよ」

ゲンドウ「なぜだ？　なぜシンジがここにいる？」

シンジ「父さんのことが知りたいから。寂しくても、いつも父さんに近づかないようにしていた。嫌われているのが、はっきりするのが怖かったんだ。でも、今は知りたい。父さんのことを」

ゲンドウ「Ａ・Ｔ・フィールド？　人を捨てた、この私に？」

ゲンドウ「まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに」

シンジ「僕と同じだったんだ。父さんも」

ゲンドウ「ああ、そうだ。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心

を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会い、私には必要がなくなった」

ゲンドウは、その後ゆっくりと内面を語り始める。

【考察】

父との争いの後にシンジは父の思いを知ろうとする。そこで父の目論見をしる。それは彼自身がアディショナルインパクトを起こし、神を殺そうと考えていること。そして自身が神となり、A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界、他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界と創造しようとしていることである。

一見、その世界は非常に理想的な世界のように聞こえるが、ミサトやリツコ達をはじめとした人々の考え（リツコ「私たちは、神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンティニューを選びます」、ミサト「私は、神の力をも克服する人間の知恵と意志を信じます」）を無視し、寄せ付けようとしな

い独善的な考えであり、何か誇大妄想的でさえある。

　そしてゲンドウを続けて次の様に言っている。「ユイと私が再び会える安らぎの世界だ」ゲンドウは彼の妻、ユイの喪失を受け入れられずに、ボウルビィの喪の作業の②思慕と探求・怒りと否認の段階（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）にとどまっており、そこで躁的防衛をしているようにも感じられる。これは新劇場版・破の最後でシンジが綾波の喪失を否認し、綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひたる心性となんら変わらないのである。

　シンジは躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しめてしまったことを深く知っている。だからこそ「父さん、もうやめようよ。」と説いている。そして成熟したシンジはより父を深く知ろうとする。そこで父はA-Tフィールドを発動するが、ゲンドウがシンジと情緒的に関わることを怯えていることが明らかになる。そしてシンジが「僕と同じだったんだ。父さんも」という。それは父と子の情緒が共有されていく瞬間のように感じられる。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。